

## 博士論文要旨

学籍番号	1217001	氏名	宇佐美 利佳
論文題目	人生の終末にある高齢患者が自分らしく過ごすための支援のあり方に関する研究		
<p><b>目的：</b>本研究の目的は、人生の終末を生きる高齢者が最期まで生への主体性と個性を保持することができるよう、高齢患者に関わる援助者が抱える課題を明確にし、課題解決に向けた取り組みを通して、高齢患者が自分らしく過ごすための支援のあり方を検討することである。</p> <p><b>方法：</b>本研究は3つの研究から構成される。<b>【研究1】</b>入退院を繰り返す対象施設の高齢外来患者の現状と対象施設の支援の現状から課題を明らかにする。先駆的に取り組んでいる施設の支援の現状から、課題解決に向けた人生の終末にある高齢患者が自分らしく過ごすための継続的支援の指針（以下、指針とする）を考案する資料を得る。対象施設の看護師と共に指針を作成する。<b>【研究2】</b>作成した指針に基づき、対象施設の高齢入院患者と家族に対し支援を実施する。その後、指針に基づいた支援を受けた対象から評価を得て、関連職種や看護師と共に評価を行う。<b>【研究3】</b>対象施設の看護師等と研究2の取り組みに関与した関連職種からの意見をj得て評価する。その結果をコアメンバーと共有し、意見をj得て評価する。</p> <p><b>倫理的配慮：</b>研究協力者に、研究の目的や方法、研究への協力は自由意思であることや匿名性の保障等について、書面を用いて口頭で説明し、同意を得た。本研究は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得て実施した（承認年月：2018年5月、通知番号30-A002D-2）。</p> <p><b>結果：</b><b>【研究1】</b>外来患者5名への面接調査の結果、高齢患者は見通しが立たない状況に生きがいがないこと、自分なりに対応したいが難しいことがある等、自分らしく過ごしたいと思う一方で難しさを感じていた。援助者は、高齢患者の意向把握の難しさや、意向を実現することの難しさを感じ、課題であると捉えていた。コアメンバーと4回検討し、対象施設職員との検討会を2回j行い、指針を作成した。</p> <p><b>【研究2】</b>作成した指針に基づいて入院患者3名に支援をj実践した。意向の実現に向けた支援を行う意義や方法を考えながら、事例を重ねてj実践したことで、援助者は、日々の関わりの中で人生の終末に関連する高齢患者の意向を捉えることができた。生きがいや役割を含め、高齢患者がこれからどう過ごしたいか、高齢患者本人が考える生きる意味や目的を捉えながら支援することが重要であることが明らかになった。また、家族の思いやこれまでの生活、立場等を考慮して、高齢患者の意向と家族の思いに応じた支援を行うことが必要であること等が明らかになった。<b>【研究3】</b>看護師や関連職種は、高齢患者の意向や生活を中心に置いて意向実現に向けた支援を行えたことや、日々の関わりの中で人生の終末に関する話し合いを行うようになったことを評価した。コアメンバーは、スタッフが、高齢者の生活を見据えた支援や意向を捉えて支援することが意識できるようになった等と捉えた。また、自身の変化としては、高齢患者が自分らしく過ごせるように関連職種間で連携して支援することの意義や可能性を感じるようになった等と捉えた。さらに、継続的に患者を支援していく体制を整える必要性や、高齢患者に関わる援助者全員が継続的に意向を確認し、支援する必要性について述べられた。</p> <p><b>考察：</b>人生の終末にある高齢患者が自分らしく過ごすための支援として、「高齢者の特徴や抱えている思いを理解して尊重すること」「誰かとともに生きている高齢者の暮らしや人生に焦点をおくこと」「“生と死”について考え続けること」が重要であるjと考える。また、その実践には、「高齢者の人としての暮らしに焦点を置いた連携」「高齢者本人が主体のチームづくり」が必要で、看護師は、高齢者の一番身近な医療者として、“生と死”を意識しながら、先を見据えて介入することや、高齢者の思いを汲み取り、表明をサポートすること、高齢者の持つ力に応じた支援体制の調整を図る役割があるjと考える。</p>			

(別記様式7)

番 号 :  
令和2年2月18日

## 令和元年度博士論文審査結果報告書

主 査 松下 光子  
副 査 服部 律子  
副 査 藤澤 まこと

令和元年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

### 記

学籍番号 : 1217001

氏 名 : 宇佐美 利佳

審査結果 :  1. 合格      2. 不合格      3. 保留

#### [審査結果要旨]

(1,000字以内)

論文題目「人生の終末にある高齢者が自分らしく過ごすための支援のあり方に関する研究」は、人生の終末を生きる高齢者が最期まで生への主体性と個性を保持することができるよう、高齢者に関わる援助者が抱える課題を明確にし、課題解決に向けた取り組みを通して、高齢者が自分らしく過ごすための支援のあり方を検討した研究である。

第一に、在宅療養支援病院であるA病院の高齢外来患者5名への面接調査による高齢者の生活の現状把握、及び外来・病棟看護師、MSWへの質問紙調査によるケアの現状把握より、7つのエンドオブライフケアの課題を明確にした。さらに先駆的に取り組む施設の支援の現状も踏まえ、病棟のリーダー看護師と共に、課題解決に向けた「人生の終末にある高齢者が自分らしく過ごすための継続的支援の指針」を作成した。第二に、高齢入院患者3名に、当該指針に基づく支援を実践し、患者の退院後に多職種参加の多施設カンファレンス、病棟看護師・外来看護師参加の振り返りカンファレンスを行い支援の評価を行った。その結果より、高齢者が自分自身の考えを意向として表出するための支援として「意向把握する姿勢を持って関わる」等、高齢者の意向を捉え実現し続けるための具体的な支援として「本人を中心としたチームでACPを実践する」等が考察された。第三に、取り組みの評価として、「高齢者の自律性に着目して継続的に意向を捉えることの重要性が認識できた」「高齢者に関わる全ての場の援助者が、高齢者が自分らしく過ごすことを目指し、考え続けることが必要である」等の意見を確認した。以上を通じて高齢者の思いを理解し尊重すること、誰かとともにいる高齢者の暮らしや人生に焦点を置くこと、援助者が生と死について考え続けることが、高齢者が自分らしく過ごすための支援のあり方であると提言された。

以上の過程は的確にデータ化され論述されており、人生の終末にある高齢患者への支援の充実に貢献する研究として高く評価できる。審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。

当該学生は審査委員会に4回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。

以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。